

分科会



早馬まつり（三股町）

学校経営と組織活動

趣旨

心豊かにたくましく生きる力をはぐくむための学校経営の進め方と、学校・家庭・地域社会が一体となった効果的な組織活動の実施及び保健主事に期待する役割について協議する。

協議題

- 1 心豊かにたくましく生きる力をはぐくむ学校経営の進め方について
- 2 保健主事を核として推進する健康教育のあり方について
- 3 学校・家庭・地域社会との連携について

第 1 分科会

発 表 主 題	発 表 者	
	所属名及び職名	氏 名
心豊かにたくましく生きる力をはぐむ学校経営 ～「いきいき にこにこ もりもり の 西小倉っ子」をめざして～	福岡県北九州市立西小倉小学校 校 長	中 村 章
心身共に健康な子どもを育てるために ～生活リズム改善のためのチーム構築をとおして～	宮崎県新富町立新田学園 校 長	児 玉 晴 男
組織的な心の健康問題への対応 ～保健室経営計画に沿った校内支援体制づくりと 保護者・地域社会との連携～	熊本県立荒尾支援学校 養護教諭	森 山 基 子

役 員	所属名及び職名	氏 名
指 導 助 言 者	福岡県教育庁体育スポーツ健康課 参 事	丸 山 晴 幹
司 会 者	宮崎県立みやざき中央支援学校 教 頭	水 迫 勇

質疑応答及び研究協議

1 質疑応答

[質問1] 中村先生の発表について

学校保健委員会への参加率がすごく低い。自分のアプローチの仕方が悪いのかもしれない。中村校長先生の学校では昼休みに行っているということで勉強になったところである。昼休みを実施する場合の先生方の休息時間の確保と保護者の参加率をもう一度教えて欲しい。

(宮崎県 大東小 岩下)



【回答】

学校保健委員会はよく話題になる。学校は組織しないといけないが実際どのくらい動いているかという点と難しい。本校は伝統的にやっていて、参加率がある。PTAの保健委員会の委員は必ず参加しないといけないので、20名ほどになる。その他にも参加を呼びかけている。参加者には、子どもたちに発言してもらおうようお願いしている。昼休みに行うので、職員の休憩時間はどうなるのかということであるが、学年で交代で年に一回ずつ出ている。夏休みの長期休業中などに振替を行っている。

(発表者 中村)

[質問2] 児玉先生の発表について

校外サポートチームの中に町内養護教諭部会が入っているのがすばらしいと思った。生活改善チームの指導の中で、9月には遅く寝ていた子どもが1月には早く寝るようになったということだが、ふり返りカードをもう少し詳しく見せていただきたい。あと、個別の指導の時に養護教諭がどのような指導をされているのかを、

もう少し詳しく教えて欲しい。それと、スマホ・携帯の保有率が高いのが気になる。事例として出ている子どもたち以外の指導をどうしているか、もう少し詳しく教えて欲しい。

(長崎県 小林小 猿渡)



【回答】

ふり返りカードは寝た時刻、起きた時刻、朝の気分、朝ごはん、排便、歯みがきの項目になっていて、数値を入れると統計のグラフになるシステムを作っている。例えば寝た時刻が遅いと一覧表にマーカーが付くようになっていて、生活のリズムが乱れているというデータが手元に届くようになっていて、小学部の場合は排便指導でマークが付いた子を養護教諭が昼休みに毎日呼んで個別に指導を行っている。家庭自身が変わっていただいた事例もある。その家庭は父親が仕事の都合で夜11時以降に夕食を家族で取っていたので、指導を行い早い時間に夕食を取るようになった。

携帯・スマホの保有率は全国的にも小学生の方が高いという結果が出ている。それは、小学生の保護者が高校入学時に持ちだした世代である。その世代の親が少年団の迎えなど便利なので、親が子どもに持たせている。本校では警鐘を鳴らして、「リビング携帯」ということで居間から携帯を持ち出さない指導をしている。

(発表者 児玉)

[質問3] 森山先生の発表について

4つの科が入っている工業高校は、4つの高校が入っているようなもので、なかなか連携が

取りにくいと言われているが、そのあたりの実情と、改善できたところを教えていただきたい。
(鹿児島県 中央高 海江田)



【回答】

普通科も入れて5つの職員室があり、それぞれに伺って情報共有をするのは大変であった。また、科によって考え方に温度差があった。そこで、いろいろな科をまたいだ学年というところに着目して取り組んでいった。各担任から科の方に情報が流れるようにした。養護教諭が科の学年を訪問して情報を共有した。

(発表者 森山)



[質問4] 森山先生の発表について

中学校との連携で口頭で色々な情報を聞くと伺ったが、宮崎県の場合は文書で高校に報告しなければならない。文書では書けない部分があっても、高校との交流がなくなかなかうまくいかない。熊本県では口頭での情報交換を日常的に行っているかを教えて欲しい。

(宮崎県 富島中 高本)

【回答】

どこの高校も出身中学校へ出向いて連絡を取っている。生徒指導面だけでなく特別支援や心と

身体健康面など課題をもっている生徒について聞き取り調査を「誰かいませんか」ではなく、一人一人のよいところを聞いて回った。中学校と高校の意識の違いはあったが、管理職へ必要性を訴え、子どもたちのために情報を共有し、継続した支援をしなければならないという考えに変わり、フェイスシートの提出率も増えてきた。

(発表者 森山)

[質問5] 森山先生の発表について

宮崎県も中高連絡会があるが、一人一人の連絡というのは難しい。管理職に連絡を入れてもらい、出身中学校へ出向き、特別に支援の必要な生徒について情報をもらい対応をしてきた。しかし、個人情報の取扱いが難しくなってきた。健康面での情報は文書での連絡があるが、それ以外の情報がなかなか伝わってこない。フェイスシートがどれくらい効果的に使われているか教えて欲しい。

(宮崎県 延岡しろやま支援 中平)



【回答】

フェイスシートの提出は学校によってバラツキがあり、前任校については、初年度は0件であった。しかし、呼びかけや管理職の働きにより、昨年度は6件であった。指導の状況を書いてももらっていた。入学後の保護者からの情報が上がってきた場合は、すぐに連絡会を開いた。入学後も継続して見守るという中学校の協力体制があったので、うまくいっていた。

(発表者 森山)

2 研究協議

【意見1】

地域や家庭との連携がポイントになると思うが、予防的教育ということで、スマホの危険性や指導などについての情報発信はどの学校でも行っている。その中で課題をもっている家庭に対して、働きかけをしているといったところが課題ではないかと思った。

(熊本県 教育委員会 後迫)

【意見2】

学校だけではなかなかうまくいかない。北九州市の場合、PTA連合会を中心に、電源10時オフ運動に取り組んでいる。小中連携、教職員やTA、地域を上げて取り組んでいる。仙台市では、市をあげて禁止しているという。

(発表者 中村)

【意見3】

スマホや携帯は社会現象として国や企業レベルで何かが起こらないと難しい。ネグレクトやゴミなどで家庭訪問も難しい場合があった。しかし前任校では、管理職にアドバイスを受けて、学級担任や生徒指導主事とタイアップしてチームプレーができていたので、スムーズに問題のある家庭に入っていった。急いで手立てをしないといけない子どもが増えているのが現状なので、職員間の温度差などの問題はあがるが、危機感をもってアピールしていかないといけないと思っている。

(宮崎県 上新田中 内田)



指導助言

福岡県教育庁教育振興部体育スポーツ健康課
参事 丸山 晴 幹

[中村校長先生の発表について]

西小倉小は長年にわたり、健康教育を推進し、先進的な取組を実践してきた学校であることがわかる。校長先生が、学校教育目標をキーワード化(いきいき・にこにこ・もりもり)し、年間の教育活動を通して子どもたちや教職員に常に意識させたことが、教育目標の具現化につながっていると感じる。

本校の体育科授業は、ボール運動を中心に「できる」「わかる」「かかわる」という学びの流れを大切にしながら、体育的な力を確実に付けていく取組であり価値がある。また、業間運動・体育的な行事においても、子どもの主体性を大事にしながら、子ども自らが運動に係わる手立てがなされている。今、体力低下が言われているが、運動を好きな子どもを育てることがその課題解決につながり、そのことは普段の授業の充実に大きく影響している。この成果については、92.5%の子どもが「体育・スポーツが好きである」という実態調査からも明らかである。

西小倉小では、中村校長先生が健康教育の仕組みづくり等において、リーダーシップを発揮し、家庭へのお便り等による周知・啓発、子どもたちへは、自主的・自治的活動である児童の委員会活動の充実に取り組まれて、その成果を上げていることがわかる。

[児玉校長先生の発表について]

新田小・中校は、小中一貫校としてのよさを生かすとともに、行政・学校が連携して町ぐるみで一人一人の子どもの実態から、課題を明らかにしながら、ケースに応じて対応策を考え、取組を進めている。これからは、児童生徒のどこに原因があるのか、また、どんな対応をするのか、学校のみでは解決することは困難が予想されるので、諸機関との連携が必要になる。その点から、新田小・中校の学校の実践は、これからの連携の取組において参考になると考える。まず、子どもたちの実態やその子どもの困り感をチームで明らかにし把握しながら、その後の対策を講じていくことが大

切である。どう対応して、何が効果があったのかを明確にしておくことが、次への対応につながっていくと思う。同時に、子どもたちの問題の原因はどこにあるのかを探りながら、他機関との連携を密にして取組を進めていくことが必要である。

今後は、担任任せにならず、校内体制を整えてチームで対応していくことが大切である。新田小・中校では小中連携のよさを生かし、行政も入りながらその体制ができている。そのような体制を整えることが、今後、学校経営においても必要であると考えます。



[森山先生の発表について]

荒尾支援学校は、保健主事が機能した取組が見られる。保健主事の役割は、学校教育法施行規則で規定されているように、「学校保健と学校全体の活動に関する調整」、「学校保健計画の作成」、「学校保健に関する組織活動の推進」などに、すべての教職員が関心を持って取り組めるように、また、それぞれの役割を円滑に推進できるように企画、連絡・調整、実施、評価、改善などの働きかけをすることが求められている。その際、マネジメントの考え方を十分に生かし、機能化することが大切である。

森山先生の実践の中では、保健主事が部会を開催したり、生徒の心のサインを見逃さない取組をされたりしながら、健康教育の中心を担い、機能化しているといえる。これからの学校では、校種を問わず保健主事の役割、機能化することが大切になると考えている。

生徒の実態をつかむ取組は大切であるが、入学

生に関しては、事前に保護者との面談等で児童の実態をいち早くつかみ、対処しているところに価値がある。まずは、校長のリーダーシップのもと、全職員が共通理解をし、組織的な対応が今後、益々求められていくと考える。各学校では生徒指導に関する会議を年間を通して意図的・計画的に、実施していただきたいものである。また、学校だけでは、解決しがたい問題もあるので、行政や関係施設等との連携はもちろんであるが、地域との連携も必要になると考える。これからは連携がキーワードになりそうである。



[健康教育での学校経営のあり方について]

目指す子どもの姿は、教師・子どもも含め、家庭や地域も意識させることが大切である。そのための具体的な手立てが地域や家庭も巻き込んだ学校経営につながると考える。そして、子どもたちにも日々、生活の中で何をを目指すのか、何を頑張るのかということが、子どもにわかる具体的な取組として明らかになり、そのことを子どもも発達段階に応じて理解させていくことが必要である。

自分の健康は自分で考える力を付けていくこと、このことが「生きる力」の育成につながっていくことになる。その取組においては、ただ子どもたちにさせるのではなく、子どもの意欲を喚起させる手だて、自分の目標が明確になるもの、視覚的な手だて等が必要になる。学校の伝統・文化、地域の特性等を生かして、子どもを中心にしたダイナミックな取組が今後、求められると考える。

[保健主事を核とした健康教育について]

西小倉小の実践では、学校保健委員会が年に3回、意図的・計画的になされている。また、その会の内容が家庭・学級にも浸透し、広がっていくような仕組み（お便り、委員会活動）ができていく。

保健主事は、学校の健康教育を推進する要であり、その自覚とやりがいを機会あるごとに認めながら、推進していくことが必要になる。今後さらに、学校保健委員会の役割が大きくなると思われる。学校保健委員会が機能し、子ども自らが健康を考えるようにするために、子どもの委員会活動での取組等を子供たち自身に提案をさせたり、PTA専門委員会の活動も紹介したりするなどしながら、さらに健康について、学校・家庭・地域の3者で考えていくことにつながってほしい。また、委員会を昼休みに実施するのは、学校の医療関係者に参加してほしいからである。専門的な立場からの助言は説得力がある。

ぜひ、年間を通した見通しを持ち、充実した学校保健委員会にしていき、各学校の健康教育の核にしていきたいものである。

[学校・家庭・地域社会との連携について]

学校・家庭・地域が協同・連携して子どもを育てること、つまりコミュニティー・スクールが全国でも増加している。このことは、3者での取組の内容が子どもたちを育てる大きな要因となっている。

健康教育については、家庭や地域の影響が大きく、学校のみでの取組では、十分にその役割を果たすとは言えない。まずは、3者で目指す子どもの姿を共有し、それぞれ3者の機能や役割を生かして、同じ接し方を子どもたちに行うことが必要になると考える。

組織的に動くことの重要性が先程の実践からも明らかになっている。子どもの自尊感情、自己肯定感を育てるためにも、日々の教育活動の中で、どんな子どもを育てるのかを明確にして共通理解しておくことが必要である。

